

公益社団法人 上伊那教育会

# 令和6年度 第75回 夏期講習

◇期日:令和6年7月30日(火) 31日(水) ◇場所:上伊那教育会館 講堂

## ○テキスト

西田哲学選集 第一巻

『西田幾多郎による西田哲学入門』

第二部「善の研究」

第一編「純粹経験」第一章

第二編「實在」第一章～第五章

## ○講師

大阪教育大学 教授 松本啓二郎 先生

## ◇1日目(7月30日) 日程

開講式 9:25 ~ 9:45

討議Ⅰ 9:50 ~ 11:35

討議Ⅱ・Ⅲ 12:40 ~ 16:30

## ◇2日目(7月31日) 日程

討議Ⅳ・まとめ 9:35 ~ 11:40

講演会 13:30 ~ 14:40

講師 松本啓二郎 先生

閉講式 14:40 ~ 15:00

## 【開講式から】

赤羽 隆 上伊那教育会長あいさつ

暑い日々が続いていますが、夏期講習へのご参加ありがとうございます。

この「夏期講習」ですが、今年で75回を数えます。始まりは戦後間もない昭和24年、飯島町の西岸寺で、上伊那郡下の青年教師が中心となって始めた思いが哲学研修へと特化され、本日へとつながっています。

今年も、この日のために、事前に4回の読み合わせ会を行い、学習してきました。大阪教育大学教授の松本啓二郎先生には、読み合わせのポイントについて多くの「問い」を交えて紙面にてご指導をいただき、元上伊那教育会長の唐澤正吉先生には、読み合わせ会での討議を踏まえながら直接ご指導をいただきました。そして、この2日間は、松本先生からも直接ご指導をいただきます。松本先生、唐澤先生、よろしくお願いいたします。

さて、ここで、松本先生を初めて中心講師として迎えた、昨年度参加者の感想をご紹介させていただくことで、この2日間の見通しを持ちたいと思います。

「9年ぶりに夏期講習に参加しました。『第一編 純粹経験』を読み合わせ、レポーターのレポート発表をもとに討議、そして松本先生による解説ととてもわかりやすい内容になっていました。レポーターの方々のレポートが身近な教育実践や子どもとの関わりが事例としてあげられており、日々の教育実践を振り返る機会となりました。古典を通して(古典に体当たりして)自分自身を見返すことがどれだけ大切なことか改めて学ぶことができました。」

「松本先生の『なぜ哲学を学ぶのか』の講演を伺って、古典を読み解釈することは、自らの理解の地平、考え方の枠組みを変えていく、つまり自分自身を形作っていく営みなのだという視点をいただきました。なぜ哲学を学ぶのか、という問いに対する一つの答えが、ここに詰まっているのだと感じました。」

結びに、夏休みのひととき、無心になって「善の研究」に浸り込む時間になればと思っています。ご参加いただきました先生方にとって、実り多き2日間となりますことをご期待申し上げ、開講の挨拶とさせていただきます。



## 【参加した先生方の感想】



■難しいテキストの内容も、自分なりの解釈を持ち合わせて、先生方と話をすることで、理解が進み、「そういうことか」、「こう考えられる」と新たな気付きにつながった。自ら問いを持つのは難しいことではあったが、学校で子どもたちがやっていることと、今回、自分がやっていることは同じだと感じた。出会いは哲学。この講習会に参加したからこそ、新たな出会いがあったので、このような機会を大切にしていきたいと思った。

■哲学はかなり難しいとは聞いておりましたが、事前読み合わせ会、夏期講習を通して「なんとなく」だが理解出来た部分もありました。しかし、なにが正しいかはわかりませんが考える事が大事なのかなと思いました。また、自分の考えだけではなく、先生方の意見や考えを聴きながら考えを深めることも重要に感じました。とても良い経験（純粹経験）になりました。

■内容を理解するのはとても難しく、何年もかけて理解を深めたいと感じました。多くの先生方の捉え方や考え方をお聞きしたり、みんなで悩んで考えたりする討議の時間がとても良い時間でした。考える面白さを感じ取ることができました。

■難しい内容ではありましたが、同じグループの先生方と議論することに意味があると思いました、学校現場とつなげて考えられる事も多く、とてもためになりました。分からない事もまだまだありますが、この2日間で得たものは大きいと感じます。

■グループが毎回変わるのでいろんな方々と話すことができました。グループ内に西田哲学が好きな人や詳しい人がいると話が弾みました。また、苦手な人であってもレポートの児童の様子から話題は広がりました。

■テスト等での評価項目は、作成者が「こうだ」と思って便宜的に設けたものだが、ひとたび設けるとそれが独り歩きしていく。妥当性を考えると不安と疑問が残る。その積み重ねが評価だとすると、それは子どものためのものではなく、教師自身の教え方や教える内容についての反省材料にしかない。教師の仕事は、そうしながら子どもの何か（「可能性」「能力」とはいえない）を発展させることだと感じた。



## 演題『 学力について考えてみる 』

講師 大阪教育大学 教授 松本 啓二郎 先生

### 【講演会の感想】

■学力を三要素に分けることに難しさがあるというのは納得できる所も大きかったです。独立した物ではなくつながっているのが、単元等のようなものはあるでしょうか。客観を重視するせいで、逆にそこから離れていく感覚があるのかもしれない。その分「丁寧」という助言があるのだと思います。

■哲学的に見れば学力の評価は矛盾しているのだということに驚きました。しかし、だからこそテストなどの数字だけでなく子どものありのままを捉えることの大切さに改めて気づくことができました。

■学力(能力)は可能性でしかないということはテストの点数でその子の全ての力となることではないという自分の考えと重なる気がした。その子そのものを私たちは捉えきることはできないし、学力もそうであると思った。その子の可能性をどう見るか、どの可能性を生かすということが問題なのかと思った。

■学力とは何か改めて考え直す良い機会になった。学力は1つのまとめとしてみるものではないことに大きく同意した。新しい視点を持つことができ大変有り難かった。

■学力そのものが存在しているわけではなく、とらえる者(児童)と観察する者(教師)があって可能性として実在する。評価についても自分自身で考えていきたい。

■個々人(児童・生徒)の能力(学力)そのものが存在しているのではない。個々人(児童・生徒)の能力(学力)は、それを捉える者・評価する者とともに存在する。つまり、学力は今を生きる現代社会の社会的実践的な文脈のなかで見出された可能性にすぎない。という松本先生の言葉を聞いて、今の自分が子どもたちを評価していることは、そういうことなのだなと思った。そう思うと、もしかしたら私たちの子どもを見る視点は今あるもの以外にもあるのではないかと自分に問うてみることは決して無駄ではないのではないかと考えた。『能力』は『可能性』でしかない。その可能性を自身で感じられる子を私たちは育てていきたい。それは目の前の子どもたちに…だけではなく、共に働くなかまに対しても、そのようにかかわることを大事にしていきたい。

■最も印象に残っているのが「学力そのものが存在しているのではない。学力は社会的実践的な文脈の中で見出された可能性。学力は可能性である。」という部分である。知情意が分けられないという事実を基に考えれば、教員が当たり前に認識し評価している学力は社会が考え出したシステムだということに驚きました。だが、社会では学校は必要であるのでこれからも今日の研修で得た知識をもとに常に考えながら与えられた仕事は確実にこなしつつ「評価」や「学力」について自分なりに考え自得していきたい。



## 【閉講式から】

### □ 田中 孝弘 夏期講習運営委員長あいさつ



「なぜ哲学するのか」それは物事の本質をとらえるため、私はそう思っていました。でも、もっとシンプルにこの問いに向き合った時に、哲学するなかで、考える面白さや考える喜びがそこにある、それは哲学と生きる喜びのようなものがあるのかもしれない、そのように私は感じました。

「哲学的考究も言葉で伝わるものではない。自得するものである」という西田幾多郎さんの言葉がテキストに書いてあることを松本先生に教えていただきました。何事もつきつめていくと、自得、自分で獲得することこそが、その人を作っていくのかもしれないと思いました。目の前の子ども

もたちが夢中になって自得しようとする学習の場・環境を私たちはいかにして、子どもたちと創っていくことができるか、そのためには、どれだけ子どもの思いや願いを感じられる自分でいられるかが大事ななと思いました。

物事の本質をとらえる哲学、考えれば考えるほど理解が深まるのかもしれませんが、この夏期講習中、私は「テキストを読み、考えながらも、テキストの言葉を受け取り、哲学を感じたい」そう思う自分もいました。西田哲学を感じ、そこにいる自分を感じることが、子どもを感じることや同僚・保護者を感じることもつながるのではないかともしました。

上伊那という地に生きるすべての子どもたちの健やかな育ちを願ってやまない私たちが、こうしてこの教育会館に集い、松本啓二郎先生・唐澤正吉先生の暖かいまなざしと教えと愛のある言葉をいただいたこの2日間、また二学期も頑張ろう、早く二学期が来ないかなと思える第75回上伊那教育会夏期講習になったのではないかなと思います。ご指導くださった松本先生・唐澤先生、共に語り合ってくださいました先生方、事前読み合わせ会から多くの準備に気をまわしてくださった系の先生方、事務局の先生方、すべてに感謝して、お礼の言葉とさせていただきます。本当にありがとうございました。

